

# 村上春樹「中国行きのスロウ・ボート」論

——対社会意識の目覚め——

山 根 由美恵

はじめに

「中国行きのスロウ・ボート」は、昭和五十五年四月『海』に発表された村上春樹の処女短編であり、『中国行きのスロウ・ボート』（昭58・5、中央公論社）に収録された。後述するように、この短編については、『村上春樹全作品集』に収録するにあたって大幅な改稿が行われている。既存の論は全て改稿前のテキストによつたものである。本稿でも単行本のテキストに基づき、論を展開する。

テキストの中心である「中国」について、主人公「僕」は次のように語る。

中国。

僕は数多くの中国に関する本を読んだ。「史記」から「中国の赤い星」まで。それでも僕は僕のための中国でしかない。

あるいは僕自身である。それはまた僕自身のニューヨークであり、

僕自身のベテルスブルクであり、僕自身の地球であり、僕自身の宇宙である。

地球儀の上の黄色い中国。これから先、僕がその場所を訪れることはまずないだろう。それは僕のための中国ではない。ニューヨークにもレニングラードにも僕は行くまい。それは僕のための場所ではない。僕の放浪は地下鉄の車内やタクシীর後部座席で行われる。僕の冒険は歯科医の待合室や銀行の窓口で行われる。僕たちは何処にも行けるし、何処にも行けない。(5)<sup>1</sup>

先行論文では、右の記述を根拠に「中国」を「僕」の概念として捉えている。そして、登場する三人の「中国人」は、「われわれ自身象徴」(阿部好二)や「日本人」に対する他者の総体(田中実)などに見解が分かれた。<sup>2</sup>しかし、あくまで抽象的・観念的で、具体的な中国人とは別に考えているところは一致している。例えば、テキストを「日本人」と中国人との関係で捉えている田中実氏は次の

ように述べる。

念の為に付け加えておく。いや、これは隣国中国へ行き着けないという話で、ニューヨークやレニングラードへ行き着けないという話ではないと読みたい人がいるかも知れない。日中にはきわめて個別特殊な歴史上の問題が介在しているのだから、それを見過ごしてはいけないという考えである。ところが、「僕」にとつての中国は、基本的には「僕自身のニューヨーク」、「僕自身のペテルスブルグ」、「僕自身の地球」、「僕自身の宇宙である」と併置されているように、これは「僕」とある特定の歴史的空間との関係を述べたものでなく、「僕」と世界のあり方、「僕」の世界観を表したものであり、「僕」が中国に行き着けないという意味は、へ私へから自分自身がいかに離れられないかということである。

ここに描かれた「中国人」は、「われわれ自身の象徴」や「日本人」に対する他者の総体に過ぎないのだろうか。それではなぜ中国人の設定をし、「僕」は三人の中国人の話を現在語ろうとするのか。中国人であることの必然性はないのだろうか。私はテキストに登場する三人の中国人にはある共通点があるように思われる。すなわちそれは「僕」が三人の中国人に対してある種の意識をもって対していたことである。

「中国行きのスロウ・ボート」が発表された一九八〇年前後は、

日本と中国双方の間で戦争責任や南京大虐殺に関する問題が問い直されようとした時代であった。石田雄氏は一九七〇年代後半から一九八〇年代を次のように述べる。<sup>3)</sup>

この言葉（引用者注 戦争責任）が再度論文や著書の主題として頻出するようになるのは、主として一九八〇年代に入ってからである。（中略）一九七〇年代における二回の天皇の外国訪問と八〇年代末の昭和天皇の死とが、もう一度天皇と日本の戦争責任問題に国際世論の注目をひく契機となった。さらにアジアにおいては八〇年代前半には「侵略」を公式に否定しようとした教科書問題への抗議という形をとって戦争責任への関心が示される。

一九八〇年代のこのような状況は、一九七〇年代にその萌芽が見られる。「一九七〇年代、ジャーナリストや大学教師が大虐殺についての論争に世人の関心を向けさせると、南京大虐殺は再び一部の教科書に載るようになった<sup>4)</sup>。国内外で「戦争責任」「南京大虐殺」問題についての関心が高まった時代である。その時代に書かれた「中国行きのスロウ・ボート」における「中国人」は、概念の国の住人という意味に留まるのだろうか。

本稿では、「中国人」の設定と主人公「僕」の語りの意味を明らかにしたい。この「中国人」は、アジアと日本との関係のアナロジーとして、いわば、時代の象徴として描かれている所もあり、その

ことを語る「僕」の意識の上に村上の対社会意識の萌芽が認められるのである。

## 一 「僕」は何故語るのか（一章）

「中国行きのスロウ・ボート」は、前述の阿部好一氏が既に指摘するように額縁構造を取っている。1から5までの五つの章に分かれ、1と5が現在時間であり、それに挟まれた2、3、4に三人の中国人の話が描かれている。氏はこの時間構成に注目し、「自信にあふれていた監督官、現実とのズレを意識しながら諦めつつある女子学生、そしてほぼ完全に現実からずり落ちて影のように生きていくセルスマン。三人の中国人のイメージはこのように変転し、ゆがみ、崩れ、下降してゆく」とテクストの戦略を明らかにし、そのことを「われわれ自身の象徴」と捉えている。

しかし、なぜ現在「僕」はこの三人を語っているのだろうか。以下、章ごとに検討していきたい。テクストは「最初の中国人に出会ったのはいつのことだったろう？」という疑問に始まる。この疑問は記憶と繋がり、記憶は「僕の記憶力はひどく不確かである。それはあまりにも不確かなので、ときどきその不確かさによって僕是谁かに向って何かを証明しているんじゃないかという気がする」とさえある」と僕自身の不確かな存在へと繋がついていく。この関係性が示された後で、「僕」は僅かに残っていた小学生の時の二つの記憶

（中国人の話、野球の試合）を述べる。初めに野球の試合で気を失ったときに「大丈夫、埃さえ払えば、まだ食べられる」（傍点原文あり）と無意識に呟いた事件が語られ、さらなる関係性が示される。

そしてそのことは（引用者注「大丈夫、埃さえ払えば、まだ食べられる、」を頭にとどめながら、僕は僕という一人の人間の存在と、僕という一人の人間が辿らねばならぬ道について考えてみる。そしてそのような思考が当然到達するはずの一点——死、について考えてみる。死について考えることは、少なくとも僕にとつては、ひどく茫漠とした作業だ。そして死はなぜかしら僕に、中国人のことを思い出させる。

ここには、「大丈夫、埃さえ払えば、まだ食べられる」という生への欲求が「僕自身」の存在や死と繋がり、それが「中国人」と関係しあつてくるという構図がある。しかし、三人の中国人との出会いがなぜ存在や死と関わってくるのか。私はそれを解く鍵として内なる意識の問題に注目したい。なぜなら三人の中国人に対する記憶は内なる意識の動きに関わる共通点があるからである。そして、「僕」はそのことに関わり、何らかのトラウマを抱えていることが窺える。

## 二 一人目の中国人（二章）

一人目の中国人の記憶は小学校時代に遡る。「僕」は模擬試験を受けるため、港街の山の手にある中国人子弟のための小学校を訪れ

ることになった。「僕」は誰かれとなくつかまえてその小学校のことを聞くが誰も知らない。「僕」はその小学校のことを「世界の果て、というにも等しい」と位置づけ、更に「暗く長い廊下、じつとりと黴臭い空気……二週間のあいだに僕が頭の中で勝手に膨らませていったそんなイメージ」などのネガティブなイメージを想像する。しかし、「僕の漠然とした予想に反して、中国人小学校の外見は僕の小学校と殆んど変らなかつたばかりか、ずっと垢抜けさえしていた。「僕」はイメージと現実との間にギャップを感じる。

そこへ監督官が現れ、テストが始まる前の空き時間に彼は自分が中国人だと名乗る。彼が「僕」にとつての最初の中国人であった。「僕」は「わたくしがこのテストの監督をいたします」。わたくし、と彼は言った（傍点原文にあり）というように、中国人教師が「わたくし」という言葉を使うことに既に違和感を感じる。更に中国人の監督官は理想的な美しい考えを小学生に述べる。

「（前略）でも努力さえすれば、わたくしたちはきつと仲良くなる、わたくしはそう信じています。でもそのためには、まづわたくしたちはお互いを尊敬しあわねばなりません。それが……第一歩です」

「だから」と彼は正面に向きなおつた。みんなの目も、やつと教壇の方向に戻つた。「みなさんも机に落書きしたり、チューイ

ンガムを椅子にくつつけたり、机の中のものにいたずらしたりしてはいけません。わかりましたか？」

確かに中国人教師は理想を述べていた。しかし、その語りはその理想に同意を強要する語りであった（「お隣同士が仲良くしなくてはいけない。そうですね？」、「机は落書きや傷だらけ（中略）さて、どんな気がしますか？」）。そして、この同意の手段に「僕」が使われることになる。

「例えばあなた」彼は実に僕を指さした。僕の受験番号が一番若いせいだった。「嬉しいですか？」

みんなが僕を見ていた。  
僕は真赤になりながら慌てて首を振つた。

「中国人を尊敬できますか？」  
僕はもう一度首を振つた。

同意の強要に「僕」が使われ、みんなの目が集まったことで「僕」は恥ずかしく思う。その結果、理想的な考えを皆と同じようには受け入れられないでいた。

「中国人の生徒たちはもつときちんとした返事をしますよ」  
はい、と四十人の小学生たちが答えた。いや三十九人。僕には口を開くことすらできなかった。

同化できなかつた「僕」は「落書き」に異常にこだわつた。後に、高校生の時に恋していた相手が「僕」と同じく中国人小学校で模試

を受けたことがわかると「僕」は彼女に「落書きはした?」、「落書きしなかったと思う? 思い出せない?」と僕はもう一度訊ねた」と繰り返し訊ねる。その質問に相手に興味を持っていないことがわかってても落書きの話題にこだわり続けた。もちろん「僕」は興味を持ってなかった彼女を「おそらく彼女の言ったことの方がまともなのだろう。何年も前にどこかの机の上に落書きしたかどうかなんて、誰も覚えてなんかいない」と理解している。しかし、この落書きの記憶は「僕」が小学校時代に思い出せる二つの記憶の一つであり、「僕」にとって極めて意味のある記憶である。

彼女を家まで送り届けたあと、僕はバスの中で目を閉じて一人の中国人の少年の姿を思い浮かべてみた。月曜日の朝、自分の机の上に誰かの落書きを発見した中国人の少年のことを、である。

ここで、「僕」が落書きをした、または、落書きを想像するということがどのような意味を持つか考えたい。「僕」は中国人小学校にネガティブなイメージを持っていた。しかし、建物は垢抜けていた、ここにギャップを感じている。それに加え、中国人監督官は理想を語る人間として設定される。「僕」は内なる中国人への意識と現実との間に二重のギャップを感じるようになる。その中、この中国人教師は彼の語る理想に対して同意を強要し、「僕」はその手段として使われてしまった。その問答に際して「僕」は皆の前で注目

させられ、返事をするのができなかった。そして、この時「僕」がした(あるいは想像した)行動は「落書き」である。中国人監督官は「お互いを尊敬しあわねばなりません」と語り、その具体として「落書き」を禁じた。その強要に使われた「僕」は同意できず、あたかもそれに反抗するように「落書き」にこだわった。

何故「僕」はそこまでこだわったのか、どうして中国人小学校の出来事は決して忘れることができない記憶となったのか。例えば、夏目漱石「永日小品」の「紀元節」<sup>3</sup>は、小さな頃に先生の些細な間違いを皆の前で指摘した自己の悪意の記憶が忘れられない話である。この「紀元節」と同じく「僕」の小学生の記憶も無意識の悪意があつたからこそ、忘れることができない記憶、トラウマとして「僕」の心に刻まれたのではないだろうか。そのことを裏付けるように、無意識の悪意の存在が二人目の中国人の話にも繋がっていく。

### 三 二人目の中国人(3章)

二人目の中国人に対する記憶は、無意識の悪意がよりリアルに描かれている。「僕」は春休みのバイトで無口な中国人女子大生と一緒に仕事をした。中国人女子学生はマイノリティという立場における自らのアイデンティティを確立するために「熱心さ」を自らに課していた。しかし、仕事でミスをし混乱する彼女を落ちつかせたことで「僕」と彼女は仲良くなり、彼女は自分が「中国人」であ

ることを明かした。仕事の最後の日の夕方、「僕」は新宿のデイス  
コに彼女を誘う。二人はより親密になるが、彼女が門限のため帰る  
と言い、「僕」が彼女を電車に乗せたところで事件が起きた。「僕」  
は彼女を逆回りの山手線に乗せるという間違いを犯したのである。  
逆回りになることで彼女は門限に間に合わなくなる。単なる間違い  
と言えるかもしれない。しかし、「僕」は無意識に取り返しのないつ  
かない間違いを犯したと感じていた。

僕は柱よりかかつて、そのまま煙草を最後まで吸った。そ  
して煙草を吸いながら、なぜだかはわからないけれど、気が奇  
妙におれていることに気がついた。僕は靴の底で煙草を踏み消  
し、それからまた新しい煙草に火をつけた。様々な街の音が、  
淡い闇の中にじんんでいた。僕は目を閉じ、息を深く吸いこ  
み、頭をゆっくりと振った。それでも気持のぶれはもとに戻らな  
かった。(中略)

しかしそれでも、僕の頭の中で何かがひっかかっていた。とて  
も小さな何か、言葉にならない何かだった。何かがどこかで確実  
に損われてしまったのだ。僕にはそれがわかっていて、何かが損  
われてしまったのだ。

その何かに思いあたるまでに十五分かかった。十五分かけて、  
僕は自分が最後にひどい間違いをしてしまったことにやっと気づ  
いた。馬鹿げた、意味のない間違いだった。しかし意味のないぶ

んだけ、その間違いはグロテスクだった。つまり僕は彼女を逆ま  
わりの山手線に乗せてしまったのだ。

ここで考えられるのは「僕」が無意識のうちに彼女を遠ざけたと  
いう事実である。「僕」は高校生の好きだった女性とデートした  
ときには「彼女を家まで送り届け」(2)ている。この場合も、同  
じように彼女を家まで送ることもできたはずである。実際、「僕の  
下宿は目白にあつたのだから、彼女を同じ列車に乗せればそれで済  
んだはずのことだった」と語っている。何よりも「僕」は「その間  
違いはグロテスクだった」と取り返しのない間違いを犯してし  
まったことを自覚している。ここには、「僕」の無意識に彼女を遠  
ざけていたという心の動きと彼女への好意との狭間にある感情が  
「奇妙に気持がぶれている」、「僕の頭の中で何かがひっかかっ  
た。とても小さな何か、言葉にならない何かだった」という煩悶と  
して描かれている。

この内なる感情の動きを彼女は差別として感じていた。先回りし  
て待っていた「僕」を見て、彼女は「わざとやったのかと思つたわ」  
と言う。「僕」がいくら誤解だと説明しても、「嘘よ。私と一緒にし  
いたって楽しくないわ。あなたが本当に間違えたんだとして  
も、それはあなたが心の底でそう望んでいたからよ」とその意識を糾  
弾する。そして、自らのマイノリティーの立場を「僕」に「気にし  
なくてもいいのよ」、「こんなのが最初じゃないし、きつと最

後でもないんだもの、「そもそもここは私の居るべき場所じゃないのよ」と語る。

しかし、「僕」は「彼女の言う場所がこの日本という国を指すのか、それとも暗黒の宇宙をまわりつづけるこの岩塊を指すのか、僕にはわからなかった」とも記す。だがここで問題なのは、それがどの場所であるかではなく、そこにおけるマイノリティーの問題である。「僕」はそれを場所の問題にすり替えている。結局「僕」はマイノリティーではない。この無理解が無意識の差別に繋がっていく。

更に「僕」は、「ねえ、もう一度初めからやりなおしてみないか?」「明日会いたい」と言い、彼女に電話すると約束しながら「煙草の空箱と一緒に、彼女の電話番号を控えた紙マッチまで捨ててしまった」。「僕」は彼女に好意を持ちながらも、最終的には無意識の行為(マッチを捨てること)によって決定的に彼女を遠ざけてしまっていた。そして、「それ以来彼女とは一度も会っていない」。

#### 四 三人目の中国人(4章)

三人目の中国人の記憶にも、無意識なる悪意がある。ここでの「悪意」は個人的なものではなく、人種という大きな枠組みのいわば集合的無意識的な悪意である。

二十八歳の「僕」が銀行に出かけた帰りに喫茶店にいたところ、「男」が声を掛け「僕」の名前を口にした。「男」は「きちんとし

た身なりではあつたけれど、何もかもが少しづつ擦り減りつつあるという印象を与えていた」と描写されている。

しかし、「僕」は「男」のことを思い出せない。

「思い出せない」僕はそれ以上考えるのを放棄してあっさりとう告白した。「悪いけどいつもそうなんだ。人の顔がうまく思い出せない」

「昔のことを忘れたがつてるんだよ、それは。きっと潜在的にそうなんだね」

「男」は思い出す努力もしない「僕」を右のように判断する。対してこの「男」は次のように述べる。

「そうそう、ところでさっきの話のつづきだけだね、俺は君と同じ理由で、昔のことをひとつ残らず覚えてるんだよ。全く妙なものだよね。どうにも忘れようとするはずほど、ますますいろんなことを思い出してくるんだよ。困ったことにさ」

この過去の思い出たくない記憶を忘れるという習性とは何か。これは「僕」個人の問題ではなく、日本人の問題と捉えることができるだろうか。この「男」は中国人であった。「僕」はそれらに関する記憶を失っている。日本人は日本人が犯した罪に対して忘却という方法で解消させようとし、そのことが当該国から弾劾されている。例えば、高橋哲哉氏は現代日本の政治の状況を「侵略戦争や植民地支配の記憶と証言が尊重されず、反対に、不断の『忘却の政

「治」にさらされている」と言う。<sup>5)</sup>「忘却」と異常なまでの記憶との配置は日本人と中国人との対置として、この場面の「僕」と「男」とは日本とアジアの国々との関係のアナロジー、時代の象徴とも考えられるのである。

中国人女子大生が「気にしなくてもいいのよ」「こんなのこれが最初じゃないし、きつと最後までもないんだもの」(3)と予言したように、「僕」が中国人女子大生に行った無意識の差別行為のようなものが、ここでも何度も何度も「男」に降りかかり、前途有望だった「男」は「何もかもが少しずつ擦り減りつつある」ようになっていった。そして、この行為を「僕」を含む日本人は忘却という方法で無意識下に収め、いかにも自分とは関係のない所で行われているように無関心となる。一九八〇年代、「戦争責任」問題でアジアと日本との関係が様々に取り上げられ、表面上ではアジアへの蔑視を反省する風潮が流れていた。しかし、それらの多くは表面上でしかない。「中国行きのスロウ・ボート」には、忘却の政治が国家レベルだけではなく、「僕」という個人にも浸透している事実が描かれている。ここには、差別をなくすという良識がいかに表面的なものであり、無意識に潜む内なる差別がどれほど根深く、恐ろしいものであるかという問題提起がある。

そして、「男」は中国人相手に百科事典を売っていると言う。中国人という言葉で「僕」は思い出す。「僕」は思い出すことで「男」

に対しての憐憫を感じている。しかし、それが自分自身の存在に關係しているとは気づかない。

## 五 再び、「僕」は何故語るのか(5章)

「僕」が内なる差別、悪意を持つ一人の人間であることを理解するのは三人目の中国人と出会って二年以上経ってからである。

既に三十歳を越えた一人の男としてもう一度バスケットボールのゴール・ポストに全速力でぶつかり、もう一度グローヴを枕に葡萄棚の下で目を覚ましたとしたら、僕は今度は何と叫ぶのだろうか？ わからない。いや、あるいはこう叫ぶかもしれない。おい、ここは僕の場所でもない、と。

そう思いついたのは山手線の車内だった。

山手線は、中国人女子大生を傷つけた舞台であり、ここで「僕」は初めて中国人女子大生の言葉の真の意味を理解したのではない。それは、自分が無意識の悪意により差別を行っていた事実である。そのことを理解したからこそ「僕」は「ここは僕の場所でもない」(傍点原文にあり)と思う。つまり、自らが行ってきた無意識の悪意、すなわち内なる差別とマイノリティーの立場とを初めて理解したのである。

そしてそれらの上で、本論冒頭にも記したように、「僕」は中国を希求し、次のようにも思う。



それでも僕はかつての忠実な外野手としてのささやかな誇りをトランクの底につめ、港の石段に腰を下ろし、空白の水平線上にいつか姿を現わすかもしれない中国行きのスロウ・ボートを待とう。そして中国の街の光輝く屋根を想い、その緑なす草原を想おう。

だからもう何も恐れるまい。クリーン・アップが内角のシートを恐れぬように、革命家が絞首台を恐れぬように。もしそれが本当にかなうものなら……

友よ、

友よ、中国はあまりに遠い。

ここでの「中国」は、地図の上の中国ではない。「僕」は、人種もしくはマイノリティーの存在を理解し、自らの内なる差別を認識し、差別がなくなる世界を想いつつ、その不可能性にも気づいているのであろう。

ここで再び「僕は何故語るのか」という問いを発してみたい。「僕」は三人の中国人に内なる差別を行い、その意識に気づいていく。この語りには「僕」の心の傷が語られているともいえるだろう。実際に、「死はなぜかしら僕に、中国人のことを思い出させる」(1)という記述、更には村上作品に多く登場する自殺した女性との関係が「僕」が大学二年生の時の出来事であることなどを考えあわせると、中国人女子大生の自殺を想起することも可能であ

る。<sup>7)</sup>「僕」は彼女を決定的に傷つけてしまったこと、そしてそれが自らの内なる差別の意識によるものであることに気づき、忘れられない記憶、トラウマとして刻まれるのである。

また、トラウマを主要なテーマとした「土の中の彼女の小さな犬」(昭57・11【すばる】)と同じ短編集「中国行きのスロウ・ボート」に収められている。「土の中の彼女の小さな犬」では、最愛の犬の死に際し、自分の預金通帳まで一緒に埋めてしまった少女が、一年後お金に困っていた友人を助けようと墓を掘り起こした結果、匂いが手に染みついたと感じてしまい、それから十年近くその匂いが取れないと思いきや、こんでしまうという話である。彼女はここの心の話をすることで少し救われる結末を迎えている。また、「1973年のピンボール」(昭55・3【群像】)も直子の死を引きずった「僕」の物語である。この時期、トラウマは村上の主要なテーマの一つであったと考えられる。

ところで、人を傷つけたことについて、村上は次のように記している。高校時代、村上と仲が良かった女の子について、ある名前を友人から聞いたので、何気なくその名前を黒板の彼女の名前の上に書いた。ところがその名前は被差別部落の俗称であり、彼女はそこから無視された。別の女の子からその理由を説明され、村上は女の子に謝ったという出来事があった。

僕にとつてそれよりもっとショックだったのは、この世界では人は誰でも、無自覚のうちに誰かに対する無意識の加害者になりうるのだという、残酷で冷徹な事実だった。僕は今でも一人の作家として、そのことを深く深く怯えている。

更に、「村上朝日堂ホームページ」における「人を傷つけること」に対する村上の回答には、村上のトラウマが吐露されている。

ただ僕の個人的な経験から、ひとつだけ偉そうなことを言わせていただくなら、人生においていちばん深く心の傷として残るのは、多くの場合、自分が誰かに傷つけられたことではなく、自分が誰かを傷つけたことですね。そのような思いは、ある場合には亡霊のように、死ぬまで重くついてまわります。

岡真理氏が言うように、「トラウマ」と語りには深い繋がりがある。「僕は何故語るのか」という問いの答えとして、トラウマを語るという形を取りながら無意識に潜む内なる差別の根深さ、恐ろしさを浮き彫りにするという物語化が行われていると言えよう。

## 六 「村上春樹全作品集」の存在

「中国行きのスロウ・ボート」は、内なる差別を行っていた自分に気づいていく「僕」の姿が描かれていた。注目したいのは、内なる差別の問題を社会に即して描かなかつた村上の問題意識である。「中国」は「僕の中国は僕のための中国でしかない。あるいは僕自

身である。それはまた僕自身のニューヨークであり、僕自身のベテルスブルクであり、僕自身の地球であり、僕自身の宇宙である」(5) というように、「僕」個人へ向けられている。つまり、アジアとの関係の解消の方法として、自身の内なる差別、自分自身の探求という方向へ向かったことである。この点こそが「中国人」の存在や死と関わる所であると考えられる。

ところで、「中国行きのスロウ・ボート」が自分自身の探求という内化の方向へ向かったことの証左として、平成二年九月に改稿された「村上春樹全作品集」(講談社)における「中国行きのスロウ・ボート」(以下「全作品」と記す)という存在があることに少し触れておく。「全作品」に収録のものにはかなりの改稿がある。単行本から「全作品」の改稿において変わった大きな違いを次に掲げる。

①「記憶の断片」「見た記憶がある」といった回想の視点の強調が全編にわたって挿入されている。

②2章の末尾、「僕」と女性の落書きについてのエピソードが削除されている。

③3章は「僕」自身の心情に焦点を当てている。例えば、中国人女子大生に謝るときに「君のことを知れば、もっと君のことを好きになれそうな気がするんだ」とあったものが「僕には僕という人間をうまく君に説明することはできない」というように、

相手への関心ではなく「僕」自身の問題として焦点化される。

#### おわりに

④4章の高校の同級生の中国人は分身的に描かれている。「僕」と反対の性格であり、「鼠」と類似するような人物として設定されている。

つまり、中国（アジア）との関係に目を向けていたものが、「全作品」では「僕」という個人の問題へ焦点化されている。『全作品』は、回想の視点の強調によって、「僕」の過去を相対化し「僕」という一人の人間の探求にその主眼が置かれている。そして、ここに登場する中国人たちは「僕」の影・分身として「僕」を追いつめていく存在となっている。ここではテクストの主軸が「僕」中心へ内化する方向へと変化している。この十年間の作家の意識の変遷とその意味などについては、同じく改稿された短篇集『中国行きのスロウ・ボート』全ての作品との比較を通じ、その資料と併せ稿を改めて考えたい。

この後、村上は内化の文学という軸を持つ「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」、「ノルウェイの森」「ダンス・ダンス・ダンス」という物語群を描いていく。

しかし、マイノリティーや対アジア意識の問題を捨てたわけではない。むしろ、別の形で持続され、拡大化していったのである。

「中国行きのスロウ・ボート」に存在した、マイノリティーと日本人、アジアに対する日本の蔑視という問題は「羊をめぐる冒険」(昭57・8「群像」)、「ねじまき鳥クロニクル」(第一部・第二部 平6・4、第三部 平7・8、新潮社)へと受け継がれる。

「羊をめぐる冒険」では特別な力を持つ羊が中国大陸から日本にやってきたことで様々な事件を起こす。この羊について説明する際に、日本の近代が西洋の考え方のみ取り入れたことを「日本の近代の本質をなす愚劣さは、我々がアジア他民族との交流から何ひとつ学ばなかったことだ」(第七章3)と批判する場面が見られる。

この考え方は「中国行きのスロウ・ボート」の問題と地続きではないだろうか。「中国行きのスロウ・ボート」は、日本人の対アジア偏見を生みだした事実、それは現在(執筆当時、昭和五十五年)においても変わらず内なる差別として日本人に浸透していた、そのことへの批判がある。そして、「羊をめぐる冒険」では更に進んで偏見を生みだした近代社会そのものへの批判という問題がある。加えて、そこには近代国家形成とそれに関わるマイノリティーであるアイヌの青年の話が挿入されている。

「ねじまき鳥クロニクル」では、かなりの分量でノモンハン事変が語られている。また、日本人が侵した日中戦争での殺戮(動物園

の虐殺が中心)の罪が現在の「僕」と密接に関係し、失踪した妻を捜す時の最も重要な鍵となっている。近代批判から更に進んで、日本人の罪を顕在化し、それが現在生きている人間の問題と絡み合うかたちになっている。

「中国行きのスロウ・ボート」は、トラウマを語るという物語化のなされた内なる差別の物語であり、内化の文学であるとともに、「羊をめぐる冒険」、「ねじまき鳥クロニクル」、「アンダーグラウンド」等にくつ対社会意識の作品群の出発点として位置づけられるのである。

注

注1 引用文の後の( )の数字は章番号である。

注2 先行論文を整理すると次のようになる。刊行されてすぐの反応として、

青山南「既読する(影)のパリエーション」(昭58・7・11「日本読書新聞」)。

川村湊「書評」(昭58・8「群像」)、山川健一「海の手帳」(昭58・8「海」)。

新井清「環境小説の誕生」(昭58・12・5「週刊読書人」)などがある。こ

れらは、作品の出来にはおおむね好意的ではあるが、気分を味わうことが肝要であり、意味を追究することは無意味であると解く。今井清人「村上

春樹OFFの感覚」(平2・10、星雲社)は、「中国」を「僕」の異境幻想

観の顕著な現れと捉え、「風の歌を聴け」におけるアメリカとの関連づけを

測る。黒古一夫「アメリカ・中国、そして短編小説」(村上春樹「ザ・ロ

スト・ワールド」平5・5、第三書館)は、「1973年のピンボール」と

関連づけ、作家村上春樹のメンタリティーの原型を読む。本格的な作品論

は、阿部好一「村上春樹論の試み―短編二、三の読解をめぐって―」(昭

63・3「神戸学院女子短期大学紀要」、田中実「港のない貨物船」(平2・12「解釈と鑑賞」)になる。

注3 「記憶と忘却の政治学」(平12・6、明石書店)

注4 ジョシユア・A・フォーゲル編、岡田良之助訳「歴史学のなかの南京大虐殺」(平12・5、柏書房)

注5 夏目漱石「紀元節」(初出、明42・2・11「大阪朝日新聞」)

注6 「思考のフロンティア 歴史/修正主義」(平13・1、岩波書店)

注7 「風の歌を聴け」(昭54・6「群像」)の三番目に寝た女の子、「1973年のピンボール」(昭55・3「群像」)の直子、「フルウエイの森」(昭62・

9、講談社の直子らは、いずれも「僕」が大学一年生の時に自殺している。

注8 「僕らの世代はそれほどひどい世代じゃなかったと思う」(村上朝日堂はいかにして鍛えられたか)平9・6、朝日新聞社

注9 引用文は「そなた、村上さんに聞いてみよう」(平12・8、朝日新聞社)による。

注10 「思考のフロンティア 記憶/物語」(平12・2、岩波書店)

\*テキストは「中国行きのスロウ・ボート」(昭58・5、中央公論社)による。

傍線は私に付した。

―やまね・ゆみえ、本学大学院博士課程後期在学―